

ケーション能力、そして自分以外のまわりの人に対する理解や愛情というものを持つことも言うまでもありません。

司会（村上） どうもありがとうございました。医学部の入学者は一般的に偏差値的な学力は非常に高いと言われてるわけですが、それに対して先生方が抱かれている不満というところから、さらに知識という測定できないような能力の教育に向けての改善、そして、いわば人間教育といったものへの期待が込められていた御発言とうかがいました。それでは続きまして、文学研究科の周藤先生のお話をうかがいたいと思います。

### 第3提案「歴史・歴史学・歴史教育」

周 藤 芳 幸（文学研究科）

歴史と歴史学 私は浪川先生などとは違って、教育に対して一家言あるというタイプの人間ではございません。名古屋大学の一構成員として、高等教育に連なる中等教育をどういう風に考えていったらいいかということ、あくまで私の専門あるいは専門に関わる中等教育の分野に即してお話させていただきたいと思います。

私の専門は歴史、厳密には西洋史学です。大学における日本史、西洋史、東洋史という日本の大学ではだいたいどこでもとられているシステムにはそれなりの事情というか、問題があるんですけど、今日はその点については触れません。まず、歴史という分野が持っている教育面での問題性に関してはじめに確認しておかなければいけないと思います。それは、歴史、歴史学、歴史教育というものが違うということです。歴史と歴史学はしばしばその差異に注意されないまま使われていることが多いと思います。歴史というのは過去に関わることというくらいしか定義のしようがない。それに対して歴史学というのは歴史とは明確に異なります。歴史学はあくまで過去において生じたさまざまな出来事に対して、その時代時代の一定の集団的な価値観、歴史認識によって再構成したものであるということになります。ですから、これはしばしば言われることですが、21世紀を迎えた現在における歴史学と50年前の歴史学はまったく相貌を異にしています。はっきりいえば、50年前はグランドセオリー、例えば発展段階論というものが歴史学の王道であると考えられていたようです。私がかつての時代を実際に経験しておりませんから細かくは分かりませんが、今現在では発展段階論とか発展段階という言葉が学会で耳にすることはまったく無くなってきた。それぐらい、この半世紀で歴史学研究は大きく姿を変えてきた気がします。

歴史教育 ところが、中等教育における社会科の世界史なり日本史なりは、この違いを故意にぼやかして展開しているのではないかと思います。確かに、過去に起きた出来事こそが歴史の中核であるという点はそれ自体正しいんですけど、大学で歴史学というものに携わっている人間から見ると、それはあまりにも当然のことです。むしろそれだけではなく「起こらなかったこと」に関する事柄が持つ力というものが最近一番注目されてきていることだろうと思います。具体的な例をあげれば、

民族などがそうですね。高校の世界史の教科書を折に触れて開きますが、私に関わる古代ヨーロッパのギリシャのところを見ると、依然としてドーリス人とかですね、エスニックなまとまりで歴史が説明されている。そういうところを読むと「おやおや」と思うわけなんですけど、そういったものが現代の学問状況に照らして記述されていないということが非常に気になります。

歴史学者は歴史上の何とかの真実ということには、あまり関心がないということですね。関心がないというと非常に語弊を招くかもしれませんが、何が真実かということはやはり判断のしようがないことだと思います。たとえごく最近起こったことであっても、それは当事者の見方によって真実は変わってくる。山のかたちはある方向からみれば円錐形であり、ある方向から見たら長い峰を持った山脈のように見える。見方によって変わる。だから真実を探ることには、極端に言えば意味がない。むしろどのような意味がありえたのか、そうした多様性に目を向けるということの方が歴史学では重要であると考えられているのではないかと思います。私は中等教育の歴史教育の現場そのものを経験しているわけではありませんので、ぜひそういう経験をお持ちの方から後ほどお聞きがしたいと思いますけれども、我々から見るとその点が一番の問題ではないかという気がします。

世界史の人気 「大学の知と高校生の学力」ということで、今日は浪川先生や玉腰先生のお話で、学力低下という言葉がキーワードです。しかし、皮肉なことにですね、歴史をやっているこの学力低下ということを意識することはあまりありません。しかも、歴史は最近では高校生の間では大変人気が高まっているように感じます。なぜそのように感じるのかというと、我が文学部では1年次の途中で専門に分かれるのですが、21の研究室のどこへ学生が所属するかは学生の希望に任されています。つい先日、その希望が分かりまして、西洋史の場合は今年19人、これは21研究室の中で群を抜いて多いと思います。対照的に、凋落著しいのは文学ですね。フランス文学でも、ドイツ文学でも年によってはほとんど学生がいないというような年もあります。それはさておき、学生はまだ1年次に入って半年ちょっとしか経っていないわけですから、大学に入ってからの影響というよりは、高校までの世界史が非常に面白いものであったために来るのでは、と思うのです。

われわれは学力低下ということをあまり感じていないわけです。ある意味では中等教育における世界史教育は成功しているのではないかと。ただ、それはもう少し考えると、我々が中等教育における成果というものをあまり正面からとらえていないので、実は学力低下を意識しないのかもしれませんが。

というのは、現在の大学における歴史教育は極端に言うと、中等教育における教育の成果として得られた知識を否定するところから始まります。ですから、そこが数学や英語とおそらく大きく違う点だろうと思います。見かけの上では高校で世界史、大学で西洋史と連続しているように見えるわけなんですけど、切り口は正反対なんですね。大学に入って以降、歴史として語られてきているものに対して疑いを抱く。それに対して自分なりの見方を要請することが歴史学の課題ということになっているのです。

ここでジレンマが生じるわけですね。つまり我々にとっては、ある意味では中等教育で決まり切った教科書的な知識を身につけてくれればそれでよい、という考え方が一方で成り立つわけです。しかし他方、そうではなくて、大学でやっているような歴史学、つまり過去というものを一線的に固

定されたものと捉えずに、さまざまな見方があり得るということを中等教育において導入した方がいいのではないか、そういう課題も一方で感じていて、これはなかなか答えの出ないことだと思います。

というのは、中等教育を受けた人がそのまま大学に来て歴史学を専門的に学ぶのかどうか、ということですね。専門的に学ぶのであれば、中等教育で批判的な図式を学んでもらって、大学ではさらに思考力を養うという、まあこれは一つの理想だと思うんですけど、一方で中等教育を受けたあと、特に専門的に世界史を学ぶのでなければ、中等教育では新たな歴史観が必要で、このあたりが高次接続ということに関わってくる大きな問題の一つになってくると思います。

中等教育段階の歴史教育の課題　そこで中等教育において、どういった歴史教育が理想であるか考えてみます。かつての世界史は非常に評判が悪かった。つまり暗記中心であると。ところが、先日の専門分野の分属のときに、一年生から聞いた話では、少なくとも大学で西洋史を学びたいと思ってやってくる学生たちは、決してそういう暗記中心の授業を高校では受けていないようなのです。彼ら自身は世界史というのはなんとなく暗記中心だと思っていたけど、高校のときの授業はそうではなかった。それが面白かったから西洋史に来た、と言うんです。これは非常にいいことだと思います。その理由を考えますと、ご承知のように社会科の教員への就職はきわめて少ないわけで、私も教育実習の巡回指導のときに、授業をのぞかしていただいてもいつも思うのは、やっぱり世界史の先生の能力はすごいんですね。県立高校とかいろいろなところへ行きますけど、こういう授業なら生徒はみんな世界史を好きになるだろうな、と感じます。それだけに非常に心配することは、やはり大学と高校との間に入試というものがあるわけで、入試に対してはどうしても網羅的な勉強というものが必要となり、そのためには理解を通じた記憶ではなくて、暗記に近いことを時にはせざるをえないということも出てくるという問題です。

そして、世界史は扱う内容の量が多すぎるわけですね。それを今までどういう風に克服してきたかということ、時間がなくなってしまうということで近現代史はやらないわけです。ところが高校では最近はそのではなく、近現代史中心の世界史というものをあえて導入するという動きも出始めたんだろうと思います。しかし、近現代史になればなるほどやはり難しいのは最初に申し上げた歴史認識の問題です。近現代史になればなるほど史料が多く、情報が多いものですから、歴史認識によって見え方が大きく変わってくる。これは古代に行けば行くほど、それは大きく変わらないですね。史料が限定されていますから。ですから、そういったことに直面せざるをえなくなると、おそらく近現代史は避けられる。

しかし一方で、専門として歴史学をやろうという場合でなければ、近現代史ほど重点的にやってほしいという声は強いわけですし、近現代史中心の世界史が導入されつつある。結局は最初に申し上げた歴史と歴史学の相違ですね。そこにやはり直面せざるをえないのかなというのが、私の感想です。

ですから、入試という枠さえなければ、中等教育で世界史を担当される方がもっとも関心を持っている分野を展開していただくのが可能でしょう。教え込むのではなくて、そこにどんな論理が読みとれるのか、ということを考えさせる。論理を解き明かさせるのには、やはりたくさんの方がなくてはなりませんし、広く浅くという知識のなかでは、論理を考えるというのは危険なことです

らあると思います。

歴史を考えるということはどういうことかと申しますと、私がよく言うのは、時間軸上、時系列上の異文化の研究なんですね。同時代における異文化の研究が相互理解のために重要であるように、時系列上の異文化というものも、多くの場合、我々のアイデンティティというものを構成しているわけです。個人としてのアイデンティティ、それから集団としてのアイデンティティというものは、時系列上の過去というものによって規定されている面が非常に強い。ですから、そういったものの理解が大変重要だというのは論を待たないと思います。中等教育段階でも、そのへんが何らかのかたちで実践に反映されていくことが理想だとは思っています。

司会（村上） どうもありがとうございました。今日は、理系お二人、文系お二人という構成で話題提供者を選んでおりますけど、周藤先生から文系ということで、理系のお二人の先生とはちょっと違って、学力低下は存在していない、中等教育は成功している。とはいえ、歴史と歴史認識の違いという点を、中等教育にどう導入するか、ということに重点があったと思います。それでは、最後に経済学研究科の根本先生のお話をうかがいます。

## 第4提案「中高大連携と経済学」

根本二郎（経済学研究科）

経済学部の大学生 経済学部というのは学生がかなりいるんですね。全国の大学の経済系は、商学、経営学もあわせると多くの学生が卒業して、サラリーマンになって日本の企業社会を支えている。ところが、中等教育では政治・経済とか倫理・社会という科目の授業は減っていないでしょうか。これでいいのでしょうか。しかも、大学や経済学部の方でも、中等教育で政治・経済を勉強してこいとか、倫理・社会を勉強してこいとかは言いませんね。だいたい、経済系、商学系といっても入試科目に政治・経済必修とかいう大学ってないんじゃないでしょうか。医学部では生物をとってこないのは困ったことだとか言うんだけど、経済学部の先生に政治・経済をとってこない学生がいるのは困ったことだという意見も聞かないわけですね。

先ほど、周藤先生は中等教育を否定するところから高等教育が、という話だったけれど、経済について言うと、中等教育と高等教育が断絶しているという気がする。僕はそれが非常にまずいと思っているのです。とにかく中等教育と高等教育をつなぐプログラムが必要です。そのためには大学側の努力が非常に求められますが、今日は中等教育のシンポジウムですから、高校に何を求めるかということだけお話しします。

社会科の教科のあり方についてですが、現在の中等教育の教材を全部調べたわけではなくて、ちょっと読みかじった教科書と聞きかじった情報から言っているんで、間違ってるかもしれませんが、政治・経済が「羅列型」になっているので、もっと「総合的」なものにしないといけない、ということをお願いしたいと思います。先ほどから、学力低下の話が出ていますが、学力低下が大問題だと